

Comparative literature of decolonization in the postwar Japan and Korea

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hara, Yusuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00062014

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07338

研究課題名(和文)戦後日本語文学と解放後韓国文学における脱植民地主義の比較研究

研究課題名(英文)Comparative literature of decolonization in the postwar Japan and Korea

研究代表者

原 佑介 (Hara, Yusuke)

立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員

研究者番号：40778940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1960～70年代戦後日本文学と解放後韓国文学における冷戦(南北分断)体制批判および脱植民地主義の比較文学・思想史研究である。植民地朝鮮生まれの小説家小林勝の総合的研究を中心に研究を進め、戦後日本文学研究史における盲点としての植民者文学の重要性を提起した。「日本と朝鮮の旧「皇国少年」たちは戦後/解放後どのように出会うのか」というテーマのもと、1920～30年代に日本帝国の各地で生まれ、帝国崩壊後に多様な経験をした日本と朝鮮の文学者たち(後藤明生、李浩哲、李恢成)の戦後/解放後の接触に着目し、彼らのポストコロニアルテクニクの比較分析をおこなった。

研究成果の概要(英文)：This research compares the literature of postwar Japan and Korea in 1960-70, focused on how Japanese and Korean writers pursued the decolonization as their main theme in the Cold War era. The main focus of this research is on a Japanese novelist Masaru Kobayashi, born in the colonial Korea in 1927. As Park Yuha criticized in 'Introduction to the literature of Repatriates', the literature of ex-colonizer has never been researched enough in both Japan and Korea.

The sub theme of this research is how Japanese as ex-colonizer and Korean as ex-colonized meet on the postcolonial era. This research mainly focused on Meisei Goto, Ho Chol Lee and Hoeseon Lee.

研究分野：戦後日本文学

キーワード：戦後日本文学 植民地 朝鮮 小林勝 ポストコロニアル批評

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、かつて植民地被支配者にされていた朝鮮人を特別な憎悪と侮蔑の標的にする植民地主義的心性が近年の日本でもはや常態化してきたという切迫した社会問題がある。本研究代表者は、この心性の歴史性を解明し批判するという目的を持ち、朝鮮および朝鮮人の視座から近現代日本文学をとらえ直すというテーマのもとで研究を進めてきた。

研究を進める中で、現下の状況は、戦後日本社会が、かつて自国が植民地化した国の人たちからの厳しいまなざしにあまりにも鈍感・無関心であり続けてきたことのツケでもあるのではないかと、という問題意識を持つようになった。文学においては、他者の眼差しに応えることは、その他者を描こうとする意志から始まる。近現代日本文学に現れた朝鮮人表象については、朴春日による先駆的研究をはじめ、渡邊一民らによる網羅的研究がある〔朴春日 1969、磯貝 1992、渡邊 2003〕。しかし、早くから鶴見俊輔が指摘していた通り、総体として日本人の文学は朝鮮人を全くと言っていいほど描いておらず、今に至るまでそこでは隣国朝鮮は奇妙な空白でありつづけている、と結論せざるを得ない〔鶴見 1967〕。この事実は、近現代を通しておよそ日本人は朝鮮を見ておらず、朝鮮人の眼差しに無頓着であり続けてきたことを示唆するのである。

そこで本研究代表者は、1960～70年代に花開いた引揚者（おもに植民者二世）の戦後文学に注目し、植民地朝鮮で生まれ育った戦後作家である小林勝の研究をおこなった。彼のテーマは被植民者のまなざしをつうじて植民者のあり方を再照明することであったという先行研究の総括〔磯貝 1981〕を受け、彼が戦後日本文学史上で最も真摯に朝鮮人の眼差しを受け止めた文学者だったと判断したためである。

2. 研究の目的

本研究は、1960～70年代の戦後日本語文学と解放後韓国文学における冷戦（南北分断）体制批判および脱植民地主義の比較文学・思想史研究である。両国の戦後／解放後文学は、「ポスト日本帝国」文学という脈絡において実質的に相互に深く絡み合い、一方の理解には他方の理解が必須であるにもかかわらず、戦後国民国家体制と言語の壁、そして植民地主義的な無関心や相互不信によって依然として寸断されたままである。こうした状況を踏まえ、日本と韓国のポストコロニアル文学を共同的に考察することを基本的な枠組みとして設定した。ポストコロニアル日本人作家の中心的人物であるといえる小林勝を中心に、多様な経歴を持つ作家たちの脱植民地主義の営みを比較検討し、「ポスト日本帝国」文学史を体系的に記述する。

本研究の目的は、特に脱植民地主義という

主題の共通性に着目し、両者を比較研究の俎上に載せることにより、日本と朝鮮半島の戦後／解放後文学・思想史をより統合的に理解することである。日本人引揚者・在日朝鮮人・韓国人の脱植民地化の努力にどのような関連性があるのかを明らかにするとともに、韓国でのさまざまな研究成果を積極的に取り入れ、蓄積のきわめて乏しい日本の解放後韓国文学研究の底上げを目指すことも、本研究の重要な目的である。

3. 研究の方法

本研究では、日本と韓国の戦後／解放後文学のうち、分断体制批判と脱植民地主義を主題にするものを取り上げ、比較研究をおこなう。対象とする地域は、原則として日本と韓国に限定する。これまで本研究代表者は、小林勝と中心とする引揚者文学の重要性を提起し、そこから在日朝鮮人文学との比較研究へと射程を広げてきた。現在は、日本語の枠を越え、帝国日本崩壊後の東アジア各地で展開したポスト帝国文学の大枠（主に日本本土・沖縄・朝鮮半島・旧満洲・台湾）のうち、日韓の比較研究をおこなおうとしている段階にある。

主要な対象時期は1960～70年代とするが、理由はおもに二つある。第一に、帝国末期に最も徹底的な軍国主義的日本語教育を受けた世代が、植民地支配の私的・社会的トラウマを克服すべく日韓両国で本格的に文学活動を展開したのがこの時期だからである。解放後韓国文学史においてこの世代は、帝国日本の影響が最も深く、その分だけ脱植民地化と戦後日韓関係は死活的な課題となった〔金哲 2015〕。第二に、戦後日韓関係史上最大の事件である日韓国交正常化（1965）をめぐって両国で空前の植民地主義批判が繰り広げられた時期を含むからである。要するにこの時期は、世界各地の民族独立運動やベトナム戦争などの情勢の影響もあり、植民地帝国期の直接体験者による脱植民地主義文学の最良の作品群が日韓両国で生み出された、両国の文学史上特筆すべき時代であった。以上のように、本研究は、原則としてこの時期の日韓両国内の文学に限定した共時的比較研究であり、異なる地域・時代のことも随時参照するものの、通時的・通史的研究はおこなわない。主要な分析対象は、小林勝、村松武司、金石範、李恢成、李浩哲らの小説をはじめとするポストコロニアル・テキスト群である。これらのうちにあらわれた脱植民地主義、脱分断の論理の比較分析をおこなう。

4. 研究成果

第1年目は、日本語論文と韓国語論文1本ずつ計2本の論文を執筆することを中心に研究を進めた。

日本語論文は、国際高麗学会の学会誌『コリアン・スタディーズ』5号の特集論文として執筆した（「植民地郷愁を撃て 小林勝

「懐しい」と言うてはならぬ」と「日本人中学校」)、小林勝の最晩年のエッセイ「懐しい」と言うてはならぬ」および同テキストにおいて反省的に論及されている初期の小説「日本人中学校」とを分析対象とし、かれの後期のテーマである植民地に対する郷愁を拒否するという問題の歴史的意義を考察した。また、日本ではもちろんのこと韓国でもまったく明らかにされていない崔圭夏(大韓民国第10代大統領)の植民地末期の動向を、上述の小林勝の自伝小説を手がかりにして浮き彫りにした。

韓国語論文は、同志社コリア研究センターと高麗大学民族文化研究院による国際共同研究「朝鮮半島と日本を越境する植民地主義および冷戦の文化」に参画し、その一環として執筆した(「

」)。朝鮮戦争期の小林勝の動向を明らかにすることおよび当時の彼のデビュー作「ある朝鮮人の話」の分析をテーマとした。日本を代表するポストコロニアル作家である小林勝が、なぜどのようにしてポストコロニアル文学の担い手として立ち上がっていったのか、その過程を詳細に記述した。その意味で同論文は、日本人によるポストコロニアル文学のきわめて重要な部分が朝鮮戦争の最中に立ち上がっていく瞬間そのものを明らかにしたものだといえる。これら2本の論文はいずれも、本研究の成果をまとめた単著(後述)の一部を構成する。

また、研究発表を2回おこなった。1回目は、原佑介「一人一人の死を数える 日本人作家が描いた朝鮮人虐殺を通して」(国際ワークショップ「戦争の記憶の継承と写真の役割」立命館大学国際平和ミュージアム、2016年6月11日)である。同発表の研究成果をもとに、2018年度以降、中西伊之助「不逞鮮人」・湯浅克衛「カンナニ」・小林勝「万歳・明治五十二年」の比較研究をおこなった韓国語論文の執筆を進め、「3・1独立運動」100周年に当たる2019年度内に、韓国の雑誌に投稿する予定である。近現代日本文学に描かれた「3・1独立運動」というテーマで進められた先行研究はほとんどない。2018年度は、この研究課題を特に重視し、近現代の日本文学者が「3・1独立運動」をどのように描いてきたのか、その全体像を明らかにすることが、この2年間の研究成果を踏まえての本研究の直近の主要目標である。

2回目の口頭発表は、原佑介「『引揚げ文学』と在日朝鮮人文学」(「『引揚げ文学論序説』を受け止める」立命館大学国際言語文化研究所、2017年1月29日)である。次年度にこの発表を論文にまとめた(「引揚げ」と「未引揚げ」のあいだ 朴裕河『引揚げ文学論序説』を手がかりに)。本研究は、日本人引揚者の戦後文学の歴史的重要性を提起してきた朴裕河の問題意識をより発展的に受け継ぐために、日本人引揚者の戦後文学と在日朝

鮮人文学を比較検討しながら共同的に考察することを進めてきた。

第2年目は、これまでの研究成果をまとめる作業を中心に研究を進めた。植民地朝鮮生まれの戦後日本人小説家小林勝の総合的研究を総括した単著の執筆を終えた。時期がずれこみ、2017年度中の出版には間に合わなかったが、2018年夏ないし秋に新幹社から刊行することが決定しており、2018年6月現在、初校ゲラ校正の段階である。

戦後日本語文学史における最重要のポストコロニアル日本人作家の一人に挙げられる小林勝の総合的研究書は、研究史上本書が初となる。朴裕河が『引揚げ文学論序説』において提唱した日本人引揚者の戦後文学の研究に、少なからぬ進展をもたらすことが期待される。研究史上初の小林勝の総合的研究であるという位置づけに鑑み、主要作品研究および評伝的要素を含む作家研究を兼ね備えた形式をとった。ほとんどすべての先行研究は作品研究であり、基本的な作家研究もまったく手つかずの状態であった。このことから、本書は小林勝の生涯の全体像を明らかにすることに重点を置いた。同書の刊行以降は、小林勝を中心とする朝鮮植民者二世の戦後文学の主要部分を体系立てる研究へとつなげていく。具体的には、村松武司、森崎和江、後藤明生、五木寛之の3名の植民地に関するテキストの比較分析をおこなう。

これらの研究活動を踏まえ、2018年度以降に引き継ぐ本研究の主要な比較研究のテーマは、「日本と朝鮮の旧「皇国少年」たちは戦後/解放後どのように出会うのか」というものである。1920~30年代に日本帝国の各地で生まれ、帝国崩壊後に多様な経験をした日本と朝鮮の文学者たちの戦後/解放後の接触に着目する。この研究計画の初期段階に位置づけられるものとして、2017年度は、後藤明生、李浩哲、李恢成という日本と朝鮮(韓国)のポストコロニアル文学史における重要作家たちのポストコロニアルの出会い(再会)の様相を明らかにした口頭発表をおこなった(「かつての「皇国少年」たちは戦後/解放後どのように出会うか 李恢成「証人のいない光景」を中心に」)。2018年6月現在、同口頭発表の成果をまとめた日本語論文を執筆中である。日本領樺太で生まれ育った在日朝鮮人小説家である李恢成は、1970年代以降積極的に訪韓し、韓国人文学者たちとも多くの交流を持った。彼の動向を把握することを中心に、解放後に彼と関わりを持った日本文学者や韓国人文学者の動向および作品を比較分析することによって、日韓ポストコロニアル文学の広がり的一端を明らかにした。完成した日本語論文は、同年度内に、しかるべき雑誌に投稿する予定である。

<引用文献>

磯貝 治良、「朝鮮体験の光と影」、『新日本文学』、10月号、1981

磯貝 治良、大和書房、『戦後日本文学のなかの朝鮮韓国』、1992

鶴見 俊輔、『朝鮮人の登場する小説』、桑原武夫編、岩波書店、『文学理論の研究』、1967、

朴 春日、未来社、『近代日本文学における朝鮮像』、1969

渡邊 一民、岩波書店、『他者としての朝鮮』、2003

池内 輝雄ほか編、双文社出版、『外地日本語文学論への射程』、2014、

宋 恵媛、岩波書店、『「在日朝鮮人文学史」のために』、2014

趙 軒求、『大江健三郎論』、中央大学博士論文、2014

『』、1989

2013

』、2013

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

原 佑介『「関係論」からみる戦後日本の「朝鮮の捨象」 権赫泰『平和なき「平和主義」 戦後日本の思想と運動』を読む』、『東アジアの思想と文化』、査読なし、9号、2018年、101-121頁

原 佑介『「引揚げ」と「未引揚げ」のあいだ 朴裕河『引揚げ文学論序説』を手がかりに』、『立命館言語文化研究』、査読なし、29巻3号、2018年、33-43頁

『』(2017 8) 査読なし、270-299

原 佑介『植民地郷愁を撃て 小林勝「懐しい」と言ってはならぬ」と「日本人中学校』、『コリアン・スタディーズ』、査読なし、5号、2017年、28-42頁

〔学会発表〕(計4件)

原 佑介『かつての「皇国少年」たちは戦後／解放後どのように出会うか 李恢成「証人のいない光景」を中心に』、世界文学・語圏横断ネットワーク第7回研究集会、2017年

原 佑介『「帰国」と「在日」のあいだ 在日朝鮮人文学における「引揚げ」の問題』、2017年度第1回比較植民地文学研究会「日韓比較文学の最前線」、2017年

原 佑介『『引揚げ文学』と在日朝鮮人文学』、『引揚げ文学論序説』を受け止める』、2017年

原 佑介『一人一人の死を数える 日本人作家が描いた朝鮮人虐殺を通して』、国際ワークショップ「戦争の記憶の継承と写真の

役割』、2016年

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原 佑介 (HARA, Yusuke)

立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員

研究者番号: 40778940